

黒本・青本と浄瑠璃絵尽し本  
——黒本『こく性や合戦』をめぐる——

*Kurohon* (black-cover books), *Aohon* (blue-cover books)  
and Joruri Picture Books  
—The *Kurohon, Battles of Coxinga*—

高橋 則子\*

Coxinga (1624–62) who tried to restore the Ming empire, had a Chinese father and a Japanese mother. Chikamatsu Monzaemon used his life story as the basis of the Joruri play *The Battles of Coxinga* first performed in 1715, it was a great success, running for more than 17 months and was soon playing in Kabuki as well.

In the mid-eighteenth century *kurohon* (black-cover books) and *aohon* (blue-cover books) were popular as simple picture books for general readers. They told stories of legends as well as used material from Joruri and Kabuki theatre. These genre have not been studied much until recently when some modern editions have been printed.

The *Kurohon The Battles of Coxinga* (pictures by Torii Kiyomitsu, published in the 1750s–1760s) is a digest of act two of the original play. However, when we compare it with the picture book (*ehon*) *Battles of Coxinga* (dates?, in Tokyo Univ. Main Library) and the Joruri *ezukushi* (picture book) *Battles of Coxinga* (dates?, reprinted in *Nihon shomin*

---

\* TAKAHASHI Noriko 都立深川商業高等学校教諭。東京学芸大学大学院修士課程卒。著書に「江戸の絵本」（共著）、論文に「鶴屋南北と産女」などがある。

*bunka shiryō shusei*, Vol.7), there are some important differences. Through this comparison I analyse the particular characteristics of the *kurohon* genre.

Finally, I compare the Coxinga legend across several genre of popular picture books in 18th century Japan.

正徳五年(1715)、大阪竹本座で初演された浄瑠璃『国性爺合戦』は、日本人と中国人との混血児、鄭成功(国性爺・和唐内)の活躍を描いた近松門左衛門の作品であり、三年越し十七ヶ月もの長期興業を記録して、一種のブームをまき起こした。翌年の享保元年には、江戸で二世市川団十郎らが和唐内に扮して演じている。また享保元年には、本文は浄瑠璃そのまま、浮世草子風の挿絵が入る『国性爺御前軍談』(京都菊屋版)や、正本屋から出され、題簽に「ゑつくし こくせんや合戦」と記された絵本で、内容は近松の浄瑠璃をダイジェストした作品も出されている。更に享保初年頃には江戸鱗形屋三左衛門から、六段本と称せられる読本浄瑠璃『国性爺合戦座敷軍談』も出されている。黒本・青本とは、江戸時代中期(延享～安永期)に広く一般庶民に読まれていた十～十五丁位の草双紙で、全丁絵と文から成り、民間伝承や稗史等様々なものを素材としているが、歌舞伎や浄瑠璃等の演劇種の作品も数多い。浄瑠璃絵尽しとは、享保頃より刊行されたもので、浄瑠璃上演に際し絵で筋を表した作品である。

本論で扱う黒本『こく性や合戦』(鳥居清満画 宝暦以降のものか)は、一時の国性爺ブームの時からは時間的経過がかなりたっている作品である。またこれは、浄瑠璃種の黒本とはいえ、浄瑠璃の筋を均等に圧縮して成っているものではなく、むしろ歌舞伎からの影響が強い作品と考えられる。絵の構図など、本書に先行する二世鳥居清信の黒本『国せんや合戦』に類似が認められ、清満はその師二世清信の黒本を手本として、焼き直しの作品を作ったのではないかと思われる。

黒本・青木と浄瑠璃絵尽し本の関係について、近年三好修一郎氏や神楽岡幼子氏のご論考があるが、本書『こく性や合戦』は、直接に深い影響関係が看取される、所謂浄瑠璃絵尽し本は現在のところ発見され得ない。

本書の成り立ちについて考察し、その意味についても若干触れてみたいと思う。

東大霞亭文庫蔵の絵本『えつくしこくせんや合戦』（正徳六年即ち享保元年刊 大阪高麗橋一丁目正本屋九兵衛）・浄瑠璃絵尽し本『国性爺合戦』（寛延三年上演時のものか 『日本庶民文化史料集成第七巻』所収）・国立国会図書館蔵の黒本『こく性や合戦』（江戸村田屋 宝暦以降刊か）の内容を比較してみると、黒本の特徴が明らかとなってくる。つまり原作浄瑠璃の発端部である中国明での思宗烈皇帝への李蹈天の謀叛を描く部分が全くなく、国性爺の虎退治が武者絵を思わせるようなポーズや衣装で、国性爺の勇猛ぶりが誇張されて表現されていること。国性爺の戦いぶりが大きく詳しく描かれていることである。特に絵尽し本とは直接に対応しない部分が多く、黒本がこの絵尽し本から深い影響を受けたとは考えにくい。

園田学園女子大学蔵の六段本（浄瑠璃を簡略化し、挿絵を入れて読み物とした、絵入の読本浄瑠璃）『国性爺合戦（軍談）』（後題簽に合戦・奥付に軍談）と、『近世演劇攷』（横山正氏 昭和六十二年 和泉書院）所収・横山正氏御架蔵本の六段本『国性爺合戦座敷軍談』は、共に羽川珍重画、江戸鱗形屋三左衛門の版で、どちらも原作の順序を大きく変えて作られている。『国性爺合戦（軍談）』は、浄瑠璃四立目の碁立軍法つまり九仙山の発端一部分のみから始まり、二段目の小むつとの別れから三段目の獅子が城へ行く所までであり、『国性爺合戦座敷軍談』は、横山氏の御論に獅子ヶ城樓門に到着し錦祥女との対面・九仙山の途中から国性爺母と甘輝との対面、四段目の小むつと梅檀女道行となっている。つまり順序は大幅に変わっていながらも内容的に重なる部分はなく、原作の二段目から四段目までを二分して出されたものであることがうかがわれる。『義太夫年表』（昭和五十四年 八木書店）に記される、安永末

年までの国性爺浄瑠璃の江戸上演は、『音曲猿口轡』に木挽町で三ノ中とある上演年未詳のものと、『義太夫執心録』に三の口とある安永四年のみであり、国性爺浄瑠璃の江戸での上演は、非常に少なかったという背景も見逃せない。

ところでこの六段本も、順序は一貫していないながらも、原作二段目から四段目までをほぼ均衡を保ちながら要約しているのであり、江戸版の絵入読本浄瑠璃も、本書の持つ特徴とは、内容的にも絵の構図的にも異なるものと言わざるを得ない。このように、絵本・浄瑠璃絵尽し本・江戸版の六段本とも本書は性格を異にし、前出の読本浄瑠璃『国性爺御前軍談』や、読本浄瑠璃『座敷操御伽軍記』（東大霞亭文庫蔵 寛延・宝暦頃刊行か）とも異なった構図の絵となっている。また、当然の事ながら『通俗明清軍談』（『通俗二十一史12』所収 享保二年 京都田中庄兵衛ら刊 岡島冠山作か）・『明清闘記』（国立国会図書館蔵 鶴飼石斎作 寛文元年 浪華柏原屋清右衛門刊）とも、本書の内容的特徴は大きく異なったものである。

してみると本書の特徴、原作二段目の鳴蛤の場面から始まり、ほぼ全丁に亙って国性爺が大きく描かれ、しかも虎退治の戦いでの勇猛ぶりが強調して描かれているといった点は、歌舞伎からの影響かと考えられてくる。

享保元年より安永末年までの江戸における国性爺歌舞伎の上演は、享保二年中村座上演の「国性爺宝船」・市村座上演の「国性爺合戦」・同十二年中村座上演の「国性爺竹拔五郎」・同十五年中村座上演の「唐錦国性爺合戦」・宝暦六年中村座上演の「月湊英雄鑑」の五回で、これらはほとんどが二世市川団十郎が和藤内(国性爺)を演じている(享保二年市村座上演は初世大谷広次)。本書の特徴は二世団十郎の舞台姿を投影させたために生じたものではないだろうか。以下、本書の二つの場面を選び出して影響関係を考察してみたい。

図①は本書一丁表の鳴蛤の場面である。これは中国の書『戦国策』中の「燕策」所収「鵲蚌之争」を、近松が日本風に演劇化したものである。本書の絵は図②の二世鳥居清信画の黒本(原本所在不明・『草双紙と読本の研究』所載 水谷不倒氏)と構図的に類似している。更に図②のこの場面が「大日本肥前の国<sup>ひぜんくに</sup>

図①



図②



図③



図④



図⑤



図⑥



まつら 松浦の郡に、<sup>あみひき</sup>網引にて世を渡<sup>わた</sup>る和藤内三官と云ものありける(適宜漢字に直した)」と、国姓爺の素姓を語る書き出しの文となっており、二世清信の黒本においても鳴蛤の場面が一丁表である可能性が強い。すると本書の最も大きな特徴は、この二世清信の黒本と同じであるといえよう。しかもその絵は、中央やや左側に和唐内を配し、頭巾をかぶらず小袖を重ねて着、外側の衣裳は半分脱いでいること、また大きな格子模様の小袖を着て、黒い股引をはいているなど、細部に互り共通する点が多い。こうした特徴は、二世市川団十郎の歌舞伎舞台姿を描く図③の『金の揮』(国立国会図書館蔵 近藤清春画 享保十三年奥村刊)や、図④の鳥居清倍画の二世団十郎の和藤内を描く役者絵(享保二年か)とも類似していて、特に、二世団十郎が歌舞伎で演じる前に上方で出版された『国姓爺御前軍談』(東洋岩崎文庫蔵)の図⑤や『ゑつくしこくせんや合戦』の図⑥の絵と較べると、その共通性が明確なものとなってくる。

同じように図⑦の本書の虎退治の場面における、和藤内の描かれ方も、図⑧の二世清信画の黒本(『水谷不倒著作集第三巻』「国性爺の虎」所載)と共通する部分が多い。近松の原作の虎退治の場面は、水谷氏によって古浄瑠璃『箱根山合戦』を基として、元禄期歌舞伎で初世市川団十郎が演じたものを、再び浄瑠璃化したものとされている。『通俗明清軍談』中にも見られないこの虎退治は、近松原本文中には、中国元の『全相二十四孝詩選』(郭居敬撰)を日本で御伽草子化した『二十四孝』(室町末期頃成立)の「楊香」が挙げられてもいる。本書の和藤内の描かれ方は、大太刀を持ち、大格子の模様の衣裳を半分脱ぎ、その下に鎧を着ている。小手や臍<sup>へそ</sup>当ての描き方、腰に巻いた太綱状の帯など、全て図⑧の二世清信の黒本の和藤内と一致する。更に虎の縞模様が足の所で渦巻き状となっていることや、母親の小袖の模様も同じである。この和藤内の描かれ方は、図⑨の『金の揮』や図⑩の鳥居清倍画の役者絵に描かれる、二世団十郎の姿とも類似していて、図⑪の『国姓爺御前軍談』や絵本『ゑつくしこくせんや合戦』とは違ったものであることがはっきりとしてくる。

图7



图8



图9



图10



图11



このように、本書黒本『こく性や合戦』は、その師である二世清信の黒本と類似しており、あらずじは浄瑠璃の原作に基づいてはいるが、むしろ二世市川団十郎の歌舞伎からの影響が強い作品と思われる。但し二世団十郎らが演じた歌舞伎の内容については、全て狂言本が残存せず、役者評判記にもほとんど触れられていないので詳しい内容はわからない。『金の揮』には、享保二年の「国性爺宝舟」を、「しぎはまぐりのぐん法時むねからわとう内のもちこみ狂言のしくみよけれ共りとうてんの役なき故不当り也」とあり、『江戸芝居年代記』に、享保十二年の上演を「市川団十郎、大当り」宝暦六年の上演を「似せ磐若 市川海老蔵、和藤内 市川団十郎、大当り」と簡単に記されているのみである。しかしこれらの記述から、享保二年の二世団十郎初演時に、李蹈天が演じられていないこと、享保十二年の竹拔五郎つまり荒事の評判が良かったことが推測され、本書の特徴とこれらの記述は一致すると考えられる。

三好修一郎氏が黒本『富士見西行』と浄瑠璃絵尽し本『軍法富士見西行ゑづくし』との本文並びに絵の構図の類似を指摘され(『叢』五号 昭和五十七年)、更に神楽岡幼子氏が黒本『丹波爺打栗』・『千本さくら』・『栗嶋譜嫁入雛形』のそれぞれの浄瑠璃絵尽し本との絵の構図の類似等を指摘(『百舌鳥国文』第八号 昭和六十三年十月)されている。加えて氏は本書黒本『こく性や合戦』にも言及されているが、本書においてはあらずじは浄瑠璃原作のものではあるが、現在見ることのできる浄瑠璃絵尽し本からの直接の影響は少ない作品である。本書は歌舞伎の二世団十郎の国性爺を投影させて作られた、二世清信作の黒本を基にした作品であり、あわせて江戸での国性爺浄瑠璃の上演が非常に少ないことにも注目したい。『国性爺合戦』のように、浄瑠璃でも歌舞伎でも上演されている作品の黒本は、そのどちらをも視野に入れて考察する必要があることを強く感じる。

ところで、絵本『ゑつくしこくせんや合戦』は、浄瑠璃絵尽し本としては太夫名も座元名もなく、絵入狂言本としては役人替名もない、分類の難しい、



珍しい体裁の本である。三丁裏から本文が始まっている点や、上が文下が絵の体裁の絵入狂言本がいくつかあることから、歌舞伎との関連も考えられる。同様に判別のつきかねる『国性爺御前軍談』・『座敷操御伽軍記』も、浮世草紙とも浄瑠璃正本ともつかぬ作品である。これらの作品群は、当時の中国への興味が庶民レベルにまで達しようとし、異国の風俗を絵入りで見せる本が求められた事を背景として、一種のブームとして次々に生み出されたものではなかったろうか。本書刊行の宝暦以降は、本格的に中国の作品の翻訳・翻案の時代に入るとされるが、黒本・青本にも『通俗三国志』(宝暦十年刊)・『倭やまと詞ことば元宗談』(宝暦十一年刊)・『漢楚軍談』(明和二年刊)等の中国種の作品が刊行されている。本書はこうした中国への興味の、庶民レベルでの表れの一環として、身近な二世団十郎の歌舞伎を媒介として刊行されたものではないか、と思われる。

本論を成すにあたりご指導を賜りました鳥越文蔵先生・武井協三先生・園田学園女子大学蔵の六段本『国性爺合戦(軍談)』閲覧につきご高配いただいた西村博子先生に、深く御礼申し上げます。また、早稲田大学演劇科の大学院の皆さん、森谷裕美子氏のご協力を得ました。深謝いたします。

## 討議要旨

小笠原幹夫氏より「国性爺合戦」の価値について、意見が述べられた。これに対し発表者、武井協三氏、宮下健三氏から、「国性爺合戦」の文学としての、あるいは演劇としての価値を論ずる発言があった。